

SLAVIC  
RESEARCH  
CENTER NEWS No.127 November 2011



グローバルCOE

◆ 岩下明裕編著『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』の受賞 ◆



授賞式で

スラブ研究センター教授岩下明裕編著の論文集『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』(北大出版会、2010年)が、このたび第24回地方出版文化功労賞を受賞しました。

同書は岩下教授をリーダーとして進行中のグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」の最初の成果として出版されたものです。海洋国家日本の実像を国境という観点から解明するというコンセプトで、北方領土、対馬、小笠原、与那国等々の「辺境」が提起する様々な問いを、国家の本質的な成り立ちの問題と捉えなおし、読者の発想の転換を促すような内容になっています。

地方出版文化功労賞は、地方出版の意義をアピールするとともに、「本の国体」を目指す試みの一環とも位置づけられています。今回の賞は、2010年10月22日から10月27日、鳥取県立図書館で開かれた「ブックインとっとり2010」に出品展示された全国の地方出版物の中から選ばれたもので、「タイムリーなテーマだが、偏りや扇動を感じさせる本が多い中で冷静に整理・提案されている」ことが受賞理由とされています(『北海道新聞』2011年7月15日付)。

今回の受賞は、グローバルCOEプログラムの目指す境界研究(ボーダースタディーズ)が日本各地に浸透し始めているなよりの証ともいえ、執筆者の多くが「境界地域研究ネットワーク JAPAN」の設立に向けて活動する主要メンバーであることを考えれば、今後の展開に大きな励みとなるに違いありません。

なおこの受賞を記念して、10月10日には北大総合博物館で「日本の境界：危機と岐路」と題する催しがおこなわれ、グローバルCOE研究の作成した「対馬」「八重山」に関する

DVD 上映と、同書の共著者の方々（黒岩幸子（岩手県立大学）佐藤由紀（早稲田大学）長嶋俊介（鹿児島大学）原貴美恵（ウォータールー大学）古川浩司（中京大学）山上博信（日本島嶼学会）山田吉彦（東海大学）ほか敬称略）によるシンポジウムがおこなわれました。[望月]

◆ サマースクール開かれる ◆



スラブ研究センターにおいて、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」が主催する「境界研究」サマースクールが8月1日（月）から8月8日（月）にわたり開講されました。昨年に引き続き開講された本教育プログラムは、大学院共通授業科目「境界研究 III・IV」を兼ねており、国内外から様々な地域や分野を研究する専門家を講師として招き、英語による講義を通じて境界研究の多様な事象を紹介するというものです。今年度は、北東アジア、中央ユー

講義のようす

ラシア、中東欧、中東などの地域における境界問題と、それにまつわる民族、言語、出入国管理、エネルギー、環境などの諸問題がテーマとして設定されました。

30名余りの履修者には、北大内の院生のみならず、海外（バンラディシュ、インド、中国、フィンランド、カナダ、モザンビーク、スペイン、ドイツ、ロシア、エストニア、カザフスタン）国籍の若手研究者が含まれており、連日、講師との間で活発な質疑応答が交わされました。また、若手研究者が自らの研究内容を英語でプレゼンテーションする機会も設けられました。特に、IBRU（ダラム大学）、カレリア研究所（ヨensuu大学）といった国際的な境界研究機関から来た研究者による報告は非常にレベルが高いものでした。



履修者・講師の集合写真

また、フィールドワークでは根室市、知床・羅臼町を訪問し、北方領土問題や「国境の街」根室、世界自然遺産についても理解を深めていただきました。

講義最終日には修了証書も授与され、学内履修者にとっては英語での講義と討論のスキルアップの機会に、そして海外から参加した若手研究者にとっては、日頃馴染みのない新たな境界問題に触れ、日本の学生との交流を深めるまたとない機会になったようです。[花松]

◆ GCOE 冬期国際シンポジウム他の日程 ◆

11月25日(金)

若手ワークショップ(使用言語:英語)

会場:北海道大学スラブ研究センター大会議室

主催:北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」

<プログラム>

13:30-15:00 Panel 1「東南アジアにおける水と境界」

神頭成禎(佛教大)“The relationship between chronicles about Batara Indra and climate change in Indonesia- Consciousness to the blessing of the water by Balinese across time”

峯田史郎(早稲田大)“Politics of Scale in the Water Security: Impact from China in Greater Mekong Sub-region”

15:15-16:45 Panel 2「ヨーロッパにおける跨境問題」

土井康裕(名古屋大)“Case Study of Cross-Border Labors: Tri-national Border Region: Oberrhein”

Jussi Laine (Karelian Institute, University of Eastern Finland) “Seeing Like a Border? Conceptualizing a Cross-Border Space for Social Contracting through Civil Society Organizations”

17:00-18:30 GCOE DVD 上映会 “Indigenous Peoples and Borders”

解説:水谷裕佳(北大、アイヌ先住民研究センター)

11月26日(土)

国際シンポジウム「世界と日本のネットワークを紡ぐ」(日英同時通訳付)

会場:北海道大学スラブ研究センター大会議室

主催:北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」

境界地域研究ネットワーク JAPAN 準備委員会

<プログラム>

9:00-11:00 基調講演「国際コミュニティとの邂逅 パート3」

Tony Payan (University of Texas at El Paso) “North American Borders: The Legacy of the Past and the Burden of the Future”

James Scott (University of Eastern Finland) “Observations on European Border Studies: The Concept of Bordering in Theoretical and Practical Terms”

討論者: Jussi Laine (Karelian Institute, University of Eastern Finland); 川久保文紀(中央学院大)

11:00-12:00 ミュージアム・ツアー

北大総合博物館 第6期「越境するイメージ:中国」ほか

12:00-13:20 ランチオン・セミナー

石川登(京都大) “Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland”

13:20-15:40 セッション1「東南アジア境界地域における開発問題」

Carl Middleton (Chulalongkorn University) “Conflict, Cooperation and the Trans-border Commons: The Controversy of Mainstream Dams on the Mekong River”

Duncan McDuie-Ra (University of New South Wales) “Beyond Greed and Grievance: the Northeast borderland in contemporary India”

Sorin Sok (Cambodian Institute for Cooperation and Peace) “Cambodia’s Border with Neighboring Countries with Engagement from Power Countries”  
討論者:石川登(京都大)

- 16:00-18:20 セッション2「境界化された空間:エルサレム、モスタル、アイルランド、沖縄」  
Emily Makas (The University of North Carolina at Charlotte) "The Boulevard and the Central Zone: Divided Mostar's Border Lines and Spaces"  
Stephen Royle (Queen's University Belfast) "Divided islands: the case of Ireland"  
屋良朝博 (沖縄タイムス) "Exploring Solutions to the U.S. Military-Base Issues in Okinawa"  
討論者: 仙石学 (西南学院大)
- 19:00- レセプション (札幌アスペンホテル)

11月27日(日)

境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) 設立大会

主催: スラブ研究センター; 北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」  
<プログラム>

- 9:00-13:00 実務会議: ネットワークについての最終調整 実務経験交流集会  
会場: スラブ研究センター大会議室

- 14:00-16:15 JIBSN 設立特別企画「激論 北方領土問題 現場からの眼差し」(日英同時通訳)  
会場: 札幌エルプラザ

北方領土問題が「危機」的な状況を迎えている。これまで様々な放送局が特番や討論番組をプロデュースしているが、政府交渉の経緯を追ったものが多く、現地の声や根室からのイニシアティブを踏まえて制作されたものはあまりない。本企画では、札幌を始めとする北海道民にもまた知られていない、北方領土隣接地域(根室管内)や元島民らの「闘い」の歴史を振り返るとともに、これらローカル・イニシアティブのあり方を検証することで討論を行う。なお討論の様子は後日 Ustream などで配信予定。

司会: 中村美彦 (フリージャーナリスト、HBC 一筆啓上・無頼放談キャスター)  
予定パネリスト: 岩下明裕 (北大スラブ研究センター・討論コーディネーター); 石垣雅敏 (根室市副市長); 本田良一 (北海道新聞編集委員); 本間浩昭 (毎日新聞報道部根室記者); 金平茂紀 (TBS) 他

- 16:30-17:00 境界地域研究ネットワーク JAPAN 設立セレモニー  
18:00- 設立記念レセプション

## 新学術領域研究

### ◆ 新学術領域研究第6回国際シンポジウム ◆

センターの冬期シンポジウムを兼ねた新学術領域研究第6回国際シンポジウムが、2012年1月19日(木)~20日(金)に、スラブ研究センター大会議室で開かれます。総合タイトルは Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order (近現代帝国の比較: 世界秩序変動の中での帝国統治と脱植民地化) です。近代帝国の統治システム、帝国間や帝国と周縁の相互認識、帝国の崩壊と国家再編、国際関係の中での脱植民地化、現在の大国を帝国として見る意味などを、ロシア、中国、インド、日本、イギリス、アメリカ、イラン、オスマン帝国を例にとって比較しながら議論します。暫定プログラムは下記の通りで、最終的なものはセンターのウェブサイトで発表します。また、1月18日(水)には前日企画として、センター外国人研究員等の報告を予定しています。[宇山]

1 月 18 日 (水)

15:30–18:00 Pre-symposium Lectures

Taras KUZIO (University of Toronto / SRC) “Ukraine at Twenty: Post Soviet or Neo-Soviet?”

Nona SHAKHNAZARYAN (Kuban Social and Economic Institute / SRC) “‘Homo Sovieticus’ through the Armenian Diaspora’s Prism: Representations, Stereotypes, and Images”

Vladimir SHISHKIN (Institute of History, Siberian Division, RAS / SRC) [Title TBA]

18:00– Beer Party

1 月 19 日 (木)

10:30–10:45 Opening Remarks

10:45–11:45 Keynote Lecture

Jane BURBANK (New York University) “Empire and Transformation: The Politics of Difference”

13:15–15:15 Session 1. Imperial Rule: Structures and Technologies

Maria MISRA (University of Oxford) [Title TBA]

Willard SUNDERLAND (University of Cincinnati) “The Tsar’s Handbook: Do’s and Don’ts for Ruling the Russian Empire, 1500s–1917”

ASANO Toyomi (Chukyo University) “Nation Building System and the System of Empire in Modern Japan”

Discussant: MATSUZATO Kimitaka (SRC)

Chair: TBA

15:30–17:30 Session 2. Empires and the “Others”: Mutual Relationships and Perceptions

Rudi MATTHEE (University of Delaware) “Imperialism vs. Collaboration: Iran and the West between the Safavids and the Qajars”

UYAMA Tomohiko (SRC) “Invitation, Resistance, and Adaptation to Empires: Cases of Central Eurasia”

KAWASHIMA Shin (University of Tokyo) “The Image of Traditional World Order and Tribute Relations in Min-kuo China”

Discussant: NAGANAWA Norihiro (SRC)

Chair: MORIKAWA Tomoko (Hokkaido University)

18:00– Reception at Sapporo Aspen Hotel

1 月 20 日 (金)

10:00–12:00 Session 3. The Fall of Empires and State Reconstruction: Legacies and Changes

Fatma Müge GÖÇEK (University of Michigan) “The Ottoman Imperial Legacy in the Middle East”

IKEDA Yoshiro (Tokyo University of Science) “Toward an Empire of Republics: Transformation of Russia in the Age of Total War, Revolution and Nationalism”

Aditya MUKHERJEE (Jawaharlal Nehru University) “Un-structuring Colonialism: The Nehru Years and Non-alignment”

Discussant: TBA

Chair: AKIBA Jun (Chiba University)

13:30–15:45 Session 4. Decolonization: Regional and International Implications

AKITA Shigeru (Osaka University) “Economic Diplomacy of J. Nehru Administration after Decolonization of South Asia”

Qiang ZHAI (Auburn University at Montgomery) “China’s Road to Bandung: Beijing’s Evolving Approach to Decolonization”

KAN Hideki (Seinan Jo Gakuin University) "The Making of 'an American Empire' and Its Responses to Decolonization"

Discussants: David WOLFF (SRC), Mridula MUKHERJEE (Jawaharlal Nehru University)

Chair: AWAYA Toshie (Tokyo University of Foreign Studies)

16:00–17:30 Session 5. New Empires? The United States and China

Rob KROES (University of Amsterdam) "America: An Empire Among Empires?"  
One more paper TBA

Discussant: FURUYA Jun (University of Tokyo)

Chair: TABATA Shinichiro (SRC)

17:30–18:00 General Discussion

### ◆ 新学術領域研究第5回全体集会 ◆

国際シンポジウムの翌日の1月21日(土)午後2時半～5時の予定で、全体集會を開催します。今回の全体集會は、最終成果出版の原稿締切が来年3月31日に迫ってきていることを念頭に置いて、次の執筆者に草稿の発表をお願いします。[田畑]

- ・松里公孝(北海道大学)・中溝和也(京都大学)「民族領域主義と連邦制」
- ・王柯(神戸大学)「『公共空間』という戦略：ムスリムとして中国に生きる」

## 研究の最前線

### ◆ 「原発ってなんだろう」講演会の開催 ◆



講演会の様子

村田学術振興財団による2011年度研究助成対象に「突発的な大規模環境汚染事故への国境を越えた社会防災の対応：ハンガリー赤泥流出事故のフィールド調査を基にした防災社会システムモデルの構築」(家田修代表、共同研究者は児矢野マリ氏[北大]と城下英行氏[関西大学])が採択され、これに基づく共同研究が始まりましたが、その一環として市民団体と共催する公開講座「一緒に考えましょう講座：原発ってなんだろう」を開催しました。

この共同研究は昨年ハンガリーで起こった大規模な産業廃棄物の流出事故、そして日本での福島原発事故を考察の対象とし、地域社会、社会防災、越境環境汚染の視点から比較研究することを目指しています。3.11後の日本社会に活用できる教訓を引き出すことが目標です。もちろんスラブ・ユーラシア地域で25年前に起きたチェルノブイリの原発事故も念頭に置かれています。

今回の講演会では、「原発神話」が蔓延していた時代から原子力発電に対して大学あるい

は現場から警鐘を鳴らしてきた先人に学ぶのが趣旨で、二人の講師を招きました。一人は京都大学原子炉実験所の助教授だった川野眞治氏、もう一人は日本原子力安全基盤機構の検査員だった藤原節男氏です。川野氏は福島原発事故以来、頻繁に報道で取り上げられた「熊取六人衆（組）」（この呼び名は中国の『四人組』に倣ってつけられたとのことで、尊敬をこめた呼称ではないそうです。「原子力安全研究グループ」が正式な名称です。詳しくは <http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/> を参照してください）の一人で、伊方原発訴訟の原告側証人を務めるなど、原発の問題性を半世紀近くにわたって指摘し続けてきました。小出裕章氏や今中哲二氏は川野氏の後輩になります。他方、藤原さんは泊原発3号炉の運転開始時に検査を担当し、不具合を検査記録に残そうとしたところ、記録の改ざんを求められたとのことで、それを内部告発（公益通報）した方です。

今回は当初、大学内と札幌市内のホールの二か所だけで講座を開催する予定でしたが、縁があり、泊原発の20-30キロ圏にある蘭越町でも宮谷内町長の肝いりで三回目の講座が町民センターで開催され、会場いっぱいに参加者が集まりました。近隣の町村からも開催を知って、駆けつけた方々もいました。町長がこのような集会を開催するのは前代未聞だとの声も聞こえました。蘭越町は環境学習講座を毎年開催してきた実績があり、今回の講演会はその延長でもありました。町民の原発に関する意識はとて高く、講師の藤原さんも答えに窮する場面がしばしばでした。「廃炉にするにはどのくらいの費用が掛かるのか、一人当たり30万円で廃炉できるなら、自分は家族のために払う」、「北電と安全協定を結ぶにはどうしたらよいのか教えてほしい」など切実な問いかけも提起され、講演会を組織した我々の側が教えられることばかりでした。と同時に、札幌を離れて「現場」に行くことの大切さと手ごたえを強く感じました。

今後も様々な視点から原発の問題を手掛かりとして、大規模な環境汚染事故への社会対応の問題を考える市民＝大学連携の公開講座を開いていきます。二度とこうした事故を起こさせないためには何が必要なのか、大学人として、市民として、そして地域の一員として何をなすべきかを考えていきます。ハンガリーでの産業廃棄物流出事故では国際河川を通して汚染が流域諸国に広がるのが危惧されました。「フクシマ」では大気と海洋を通して既に大規模な汚染が世界に拡散しています。原発でも、そして巨大産業でもそうですが、我々の時代の科学技術は一たび事故を起こせば地域も国境も越えて被害が広がることを肝に銘じなければなりません。今回の共同研究はフクシマを国際的な見地から考えるための第一歩です。

第二回目の講座は12月3日（土）にスラブ研究センターで吉田文和氏（北大）と山口たか氏（福島の子もたちを守る会）を招いて、第三回は来年1月14日（土）に新札幌サンピアザ劇場で池田元美（北大名誉教授）を招いて開催します。原子力も、放射能も、エネルギーも、すべて次の世代を作る若い人たちにとってよりいっそう切実な問題です。考えることから一緒に始めましょう。皆様のご参加をお待ちしています。（家田：公開講座は家田研究室のホームページ <http://src-hokudai-ac.jp/ieda/> でも閲覧可）[家田]

◆ 「地域研究コンソーシアム賞」 第一回受賞作の発表 ◆

地域研究コンソーシアムは今年で結成8年目になりますが、一層の地域研究の発展を期して今年度から「地域研究コンソーシアム賞（JCAS賞）」を創設しました。顕彰の対象は「国家や地域を横断する学際的な地域研究」の推進、「地域研究関連諸組織を連携する研究実施・支援体制」の強化、そして「人文・社会科学系および自然科学系の諸学問を統合する新たな知の営み」に資する研究、企画、活動です。顕彰対象の内容に合わせて、次の四つの部門が設けられています。

1. 地域研究コンソーシアム研究作品賞：個人ないし共同による学術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書の作品を対象とする。
2. 地域研究コンソーシアム登竜賞：大学院生及び最終学歴修了後10年程度以内を目安とする研究者による学術研究業績で、賞の趣旨に合致する公刊論文ないし図書の作品を対象とする。
3. 地域研究コンソーシアム研究企画賞：共同研究企画で、賞の趣旨に合致し、今後の地域研究の動向に対して大きなインパクトを与えたシンポジウムの開催や研究プロジェクトの遂行などの企画を対象とする。
4. 地域研究コンソーシアム社会連携賞：学術研究以外の分野で賞の趣旨に合致する活動実績を対象とする。



授賞式にて 手前の3名が受賞者

第一回の受賞は、研究作品賞が堀江典生編『現代中央アジア・ロシア移民論』（ミネルヴァ書房）、登竜賞が王柳蘭『越境を生きる雲南系ムスリム：北タイにおける共生とネットワーク』（昭和堂）、そして社会連携賞が石井正子氏の「緊急人道支援と地域研究の人材交流支援」活動でした。（研究企画賞は応募なし）

スラブ・ユーラシア研究者で、スラブ研究センターの2010年度客員教授だった堀江さんが大きな賞を受賞されたことは、大変うれし

いことです。おめでとうございます。受賞の理由について審査委員長の田中耕司京都大学教授は11月5日に大阪大学でおこなわれた授賞式で次のように述べました。堀江さんの受賞作は、その「共同研究の企画、実施にあたってさまざまな困難があったものと推測されるが、労働移民に密着したアプローチによってロシアが抱える移民問題の重要性と深刻さを浮き彫りにするとともに、ロシアならびに中央アジアの移民問題を包括的に取りあげることによってこの地域の移民問題への関心を喚起することに成功している。地域研究、経済学、人口学、社会学、安全保障学等の専門家と国際機関の実務家からなる国際的共同による新たな地域研究のスタイルを切り拓く好事例として研究作品賞にふさわしい作品」と認められるというものでした。詳しい審査の講評は地域研究コンソーシアムのホームページで見ることができます <http://www.jcas.jp/about/awards.html>。

JCAS賞は自薦、他薦のどちらでもよく、来年度の選考対象は2010-11年度（2010年4月1日から2012年3月31日まで）に刊行された作品、あるいは実施された研究企画ないし活動実績です。みなさんも応募してみませんか。来年はあなたが次の受賞者。[家田]

## 地域研究コンソーシアム賞研究作品賞を受賞して

堀江典生（富山大学極東地域研究センター）

編著『現代中央アジア・ロシア移民論』（ミネルヴァ書房）に対して地域研究コンソーシアムより地域研究コンソーシアム賞（研究作品賞）をいただきました。受賞は、執筆者と翻訳者の方々、本書の背景である平成19年受託「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」による「中央アジア移民管理と多国間国際協力の必要性に関する研究」に参加してくださった研究分担者や研究協力者、調査に協力してくださった現地のみなさん、プロジェクトやシンポジウムの運営を支えてくださった方々に帰するものだと思います。本プロジェクトのシンポジウム開催では、スラブ研究センターの境界研究の拠点形成「スラブ・ユーラシアと世界」の後援を頂き、ご協力いただきました。記して感謝いたします。



受賞しながらこのように申し上げるのも不謹慎かもしれませんが、本書の完成度は高いとは言えません。これまでも厳しいご批判を頂くことも多く、それらのご批判に反論できるぐらいの周到な作品ではなく、ごもっともと納得いくことがほとんどです。『ユーラシア研究』誌において書評してくださった北海道大学樋渡雅人先生から、本書の分析が受入国に偏った議論であること、送出国側の論理が欠落している点など、明快に本書の欠落を指摘してくださいました。そのとおりだと私たちも考えています。未完成な成果ですので、やり残したことは多く、今後中央アジア地域を舞台とした移民研究はまだまだ開拓すべき課題が多いと思っています。

そうしたやり残した課題を意識し、私たちも次のステップに進もうとしています。本書の背景となった研究プロジェクトでは行えなかった送出国側での調査は、関連研究機関や研究者の現地調査協力を受けながら、タジキスタンのソグド州において実施しています。現地でありがたいほどの協力を受けながらも、研究アイデアを現地調査実施にまでもっていくプロセスは、それでも試行錯誤の連続で、思うように行かないことばかりです。

本書のもとになったプロジェクトでもそうでしたが、様々な調査上での困難に向き合うには、現地で調査を支えてくれる方々とどのように「共に働く」という意識を共有できるかが重要だと考えています。地域の課題に対してタジキスタンの大学や研究機関からの参加者、受入国ロシアからの参加者、そして私たち日本の研究者がアイデアを共有し、共に調査し、そこで得られる地域研究の知見を共有し、そして反省し、共に働いた成果として発信していくといった一連の信頼関係・研究意欲・成果への期待が醸成されて初めて私たちはわくわくする調査ができると思います。もちろん、研究者だけでなく、調査対象となった方々、そのご家庭の方々、村やコミュニティの代表者の方々のご理解ご協力なしには調査もできません。

理想を語るのは簡単ですが、しかし、遠い国での調査です。現地調査に関わってくれる研究者や院生のみなさんとアイデアや方法論を共有できるよう工夫しても、いざ調査を始めるのとんでばらばらということもよくあります。また、不測の事態も現地ではつきものです。訪問したご家庭のご主人がインタビューに回答する暇もなく現地の研究協力者が話し続けて調査にならなったり、調査に出かけたマハラで調査そっちのけで結婚式に招待され、あれよあれよという間に日が暮れて何もできないまま宿に引き返したり、インタビューに訪れたご家庭ごとに歓待を受けて胃もたれに悩まされたり、滞在時は毎日がスラップスティックです。

調査している課題について現地の大学で学生向けに講義する機会がありました。講義が終わったあと、学生達が後を追ってきて、現地調査を手伝いたいと目をきらきらさせながら訴えました。自分たちの身近な問題が遠い日本という国で研究されていて、自分たちの地域で調査が行われていることに、わくわくしたのかもしれませんが。現地の人たちとわくわくする研究をこれからもできるように、がんばりたいと思います。

本書を契機にして、我が国において中央アジアを含む旧ソ連地域の移民研究に多くの方々が参画することを期待しています。この地域の移民研究には参画する余地が広く残されており、またやれば夢中になること間違いありません。本書は、中央アジア地域の新たな移民研究の展開を促すために企画されたものです。

#### ◆ マフムドル氏の滞在 ◆

アゼルバイジャンのカフカズ大学のジェイフン・マフムドル (Mahmudlu, Ceyhun) 氏が、2011年9月3日から10月1日まで、国際交流基金知的交流フェローシップ事業によりセンターに滞在しました。研究テーマは「アゼルバイジャンと日本の関係：エネルギー協力と将来の展望」で、日本のエネルギー関係の研究者・実務家のインタビューを精力的にこなしました。また、セミナーではアゼルバイジャンとロシアの関係をテーマに報告しました。セミナー後の夕食会で、センター外国人研究員でアルメニア人であるシャフナザリヤンさんと、両民族の複雑な関係について、緊張を含みながらも友好的な会話をしていたのが印象的でした。[宇山]

#### ◆ ムーヒナ氏の滞在 ◆

日露青年交流事業若手研究者フェローシップにより、サルダアナ・ムーヒナ (Mukhina, Sardaana) 氏が11月1日から1年間センターに滞在します。ムーヒナ氏はサンクトペテルブルグ国立大学を卒業後、モスクワの日本大使館に勤務していました。研究テーマは、「経済とエネルギーの分野における日ロ関係」です。[田畑]

#### ◆ 研究会活動 ◆

ニュース126号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、世界文学研究会、北海道中央ユーラシア研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです（前ページまでに記事のあるものは除く）。[大須賀]

- 8月9日 K. マクスト (ユーラシア国立大・院、カザフスタン) “Slovak Policy in Kazakhstan: Implementing Economic Agendas” (センター・セミナー)
- 8月18日 大西健夫 (岐阜大) 「バルハシ湖はなぜアラル海のように干上がらなかったのか？」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 8月29日 井上暁子 (センター) 「越境するポーランド文学: 亡命・移民文学を中心に」(世界文学研究会)
- 9月20日 近藤大介 (一橋大・院) 「ゴーゴリ『アラベスク』と視覚文化: 散文は絵のごとく」; 千葉美保子 (関西大・院) 「モスクワの新外国人村: 近世ロシアにおける外国人居留者とその居住空間の一事例」(鈴川・中村基金奨励研究員報告会)
- 9月26日 小松久恵 (センター) 「Pride and Prejudice: 20世紀初頭北インドにおけるマールワリー・イメージをめぐる一考察」(GCOE・SRC研究員セミナー)
- 9月28日 C. マフムドル (カフカズ大、アゼルバイジャン) “Azerbaijan-Russian Relations: Friendship, Hostility, or Balance Policy” (センター・セミナー)
- 9月29日 「EUにおけるドイツ語の地位」& 「スラヴ諸語の親近性、相互了解性」セミナー V. ドヴァリル (カレル大、チェコ) “On the Status of German in the European Union”; M. スロボダ (同)

- “How Similar and Mutually Intelligible Are Slavic Languages?” (GCOE・SRC 特別セミナー)
- 10月1日 熊倉潤 (東京大・院) 「ソ連中央アジアの政治エリートの形成：1920年代後半のウズベキスタン共産党中央委員を中心に」；立花優 (北大・院) 「国内問題としてのナゴルノ・カラバフ紛争」(北海道中央ユーラシア研究会)
- 10月2日 グエン・アン・フォン (淑徳大) 「ベトナムのアルミ産業と赤泥問題：コメコン調査から中国企業による開発までの経緯」(センター・セミナー)
- 10月6日 G. レヴィントン (SRC) 「マンデリシュタームとドストエフスキー (ロシア語)」(センター・セミナー)
- 10月11日 V. ポジガイ＝ハジ (リュブリャナ大、スロベニア) “A Contemporary Sociolinguistic Look at Former Yugoslavia” (センター特別セミナー)
- 10月13日 V. ポジガイ＝ハジ (リュブリャナ大、スロベニア) “Croatian and Slovenian: A Review of Studies on the Relationship between the Two Languages” (センター特別セミナー)
- 10月17日 S. ジェムホフ (ジョージワシントン大、米国) “Islamic Practices and Socio-Political Behavior in the North Caucasus: Effects of the Hajj Pilgrimage” (新学術第5班セミナー)
- 10月19日 「ロシアにおけるイエズス会の神話」セミナー 望月哲男 (SRC) 「ロシア文学におけるイエズス会の影 (ロシア語)」；E. アスタフィエヴァ (同) 「ロシアのイエズス会神話を作った男？、ユーリー・サマーリン (ロシア語)」(センター・セミナー)
- 10月20日 桜間瑛 (北大・院) 「民族の歴史の語りと疎外：映画『ジョレイハ』とタタールの現在」(世界文学研究会)

## いかに私は国境に紡がれたか：GCOE「境界研究の拠点形成」秘話・誕生編

岩下明裕 (センター)

### 1 与那国の「誓い」

2009年10月からスタートしたグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」が掲げた目標の一つ、それは日本の国境・境界地域研究にかかわる学会ならぬ、ネットワークをつくるというものだ。発端は2007年9月に開催された日本島嶼学会与那国大会で、「国境フォーラム」を組織せよと依頼を受けたことに始まる。外間守吉与那国町長に加え、長谷川俊輔根室市長、松村良幸対馬市長(当時)らの3人で「国境自治体サミット」をやらうと言い出したのはよかったが、その直後、ワシントンDCのシンクタンク、ブルッキングス研究所の訪問研究員に呼ばれることになった。

先に受けた仕事は可能な限りやる、というのが私のモットーなので、8月末ワシントンに着いて2週間もたたないうちに、同伴家族を置き去りにして、成田経由で与那国に向かった。と書くといとも簡単そうだが、成田についてからが難儀だった。ワシントンを出るときには熱帯低気圧だったものが、成田に着いたときには台風になっており、那覇便は欠航となった。1日遅れで石垣を経て与那国にたど



八重山：島仲久ファミリー LIVE IN 北大

り着くや否や、フォーラムが始まった。対馬市長は与那国行きを断念。往路では台風をかわした根室市長も、帰路では次の台風に追撃され、石垣で丸一日足止めを食らう。「根室は厳しいと思っていたが離島はもっと大変だな」。根室市長の率直な言葉だが、後に冬の根室に降り立った与那国町長は雪で3度転び、北海道の厳しさを口にする<sup>(1)</sup>。

対馬市長が台風で来られなかったことを帰路で反芻しながら、私はこの出来事を一度きりのショーで終わらせるなという天の声だと感じた。2008年10月、小笠原返還40周年記念という言葉に釣られ、島嶼学会有志と小笠原フォーラムを開催することになった。だが、10ヶ月の米国滞在で同僚たちに迷惑をかけていた、新米センター長が1週間も札幌を離れることにはためらいも多く、私自身は参加を見合わせた<sup>(2)</sup>。

次は根室かなと思い始めた矢先の2009年夏、GCOE「境界研究の拠点形成」採択の朗報が届いた。これにより、企画していた「国境フォーラム IN 根室」はGCOEイベントとして大がかりなものとして化していった。「12月のGCOE立ち上げ国際シンポジウムと連動させよう、欧米の研究者たちに北方領土をみてもらおう」。さらに、過去2回のフォーラムの成果でもある『日本の国境:いかにこの「呪縛」を解くか』(スラブ・ユーラシア叢書 北大出版会)を「国境フォーラム IN 根室」で地元の人たちに真っ先に届けたいと思い、全執筆者が集うブックトークも企画した。だが雪の影響などもあり、北大出版会から宅配便で本が会場に届いたのはイベント開始の直前となる<sup>(3)</sup>。「国境フォーラム IN 根室」は、与那国町長をはじめ対馬の財部能成新市長、小笠原の渋谷正昭課長も参加し、大いに盛り上がった<sup>(4)</sup>。ただ、始まったばかりのGCOEゆえにスタッフの多くが着任直後であったこと、私自身が馴れないセンター長として右往左往していたこと、さらには急ごしらえの根室でのイベントであったこともあり、このフォーラムでは仲間たちを振り回した反省ばかりが残った。このときご尽力いただいた方々にはただただ頭を下げるしかない。

反省はまだまだ続く。「わざわざ遠くから集まるのだから、イベントだけでなく、もっと中身をつくってほしい」。やる気あふれる対馬市長の言葉は私を撃った。だが同時に市長は2010年秋に対馬でやろうともみんなに呼びかけた。

境界地域を結ぶ実務的なネットワークをつくる。この新しい宿題はこれまでフォーラムと一緒に組織してきた仲間たちに共有され、笹川平和財団からも助成を受けることが決まった。プロジェクトの発展は嬉しいかぎりだが、運営規模の拡大は私を追い込んでいく。しかも、今度の開催場所は同じ北海道の根室ではなく、遙かなる対馬である。幸いにも九州出身

---

1 岩下明裕編『日本の国境:いかにこの「呪縛」を解くか』北海道大学出版会、2010年の序章をみられよ。

2 万が一、この文意がわからない読者は、小笠原へどうやっていくかを調べてほしい。

3 2011年11月、「ブックインとっとり」により地方出版文化功労賞がこの本に受賞されることになり、さすがに全執筆者とはいかなかったが、多くの関係者が集う記念イベント「日本の国境:危機と岐路」を開催した。その夜は、執筆者と北大出版会の主催により北海道風沖縄料理屋「うみんちゅぬ・やまんちゅぬ」北大前店でささやかなパーティーを開き、関係者の方々へ御礼をした。総長はじめ多くの方々足を運んでいただいたが、本書への最大の功労者は、カバーや地図のデザインを担当した伊藤薫さんである。実際、GCOEの博物館ブースに設置されている巨大地球儀も彼の発案だ。GCOEの採択直後、当時すすきのにしかなかった「うみんちゅぬ・やまんちゅぬ」で練ったアイデアが下になったものだ。「沖縄を北海道に持ってくる、北海道を沖縄に持っていく」。これもGCOEの根っこであり、北と南をつなぐ博物館移動展示構想へと連なる。この場をかりて、伊藤さんには改めて御礼を申し上げたい。もう一つ、これを書く朝日新聞社の方に怒られるだろうが、国境に関心をもつ仲間たちとつくった共同作品が、鳥取という別の地方で評価されたことは、大佛次郎論壇賞をいただいたときよりも嬉しい。[http://borderstudies.jp/news/index.php?y=2011&m=10&log\\_id=287](http://borderstudies.jp/news/index.php?y=2011&m=10&log_id=287)

4 <http://borderstudies.jp/essays/live/pdf/BorderliveNO1.pdf>

である私は、知己を片端から当たって、現地ロジを引き受けてくれる善きパートナー、九州経済調査協会の加峯隆義さんを見いだすことができた。韓国語が堪能な加峯さんは、釜山と福岡を毎週のように往来する日韓海峡圏の架け橋である。だが加峯さんをもって、対馬でのフォーラム組織は一筋縄ではいかなかったようだ<sup>(5)</sup>。また中京大学の古川浩司准教授らの奮闘により、各自治体で国境協力などを担当する実務者を招請でき、これまでの開催地である4自治体（与那国、小笠原、根室、対馬）のみならず、稚内、竹富、大東島、佐渡、隠岐など地域的な広がりも得た。フォーラムも4自治体も一周したことだし、イベント性の強い「国境フォーラム」はもういいだろう。こうして実務を軸とした境界地域研究ネットワーク結成の機運が高まった。

だが新たなチャレンジが待ち受けていた。対馬を乗り越えて気をよくした私は、ネットワーク結成の準備にむけ、実務会合を与那国でささやかに組織しようと呼びかけた。これを聞いた外間与那国町長は「せっかくやるのだから、飛行機をチャーターして台湾でもセミナーをやるか」と切り返す。今度こそこぢんまりの目論見はかくて崩れた。与那国・花蓮のチャーター便との「闘い」で、私は今年、幾度、眠れない夜を過ごしただろう（それでもセンター長時代よりは眠れた）。思い出したくないことばかりだ。ここから先は書けるほど熟していない<sup>(6)</sup>。

率直に言って、大学教員になって以来、旅行代理店の元締めのようなことまでやるはめになるとは想像しなかった。だがよくよく考えてみれば、旅行社は国境越えをコーディネートするパイオニア的存在なのだから、多くの人々を境界地域へ連れて行こうとすればその役割を担うことになるのは必然なのかもしれない。一見、華やかにみられることの少ないGCOEだが、離島や田舎の軋轢にもまれながらの地道な交渉や粘り強い作業は、都会の快適な暮らしとは対照的な辛酸の日々である。ポードスタディーズの成果は、現地回りや飛び込み営業など、とにかくあきらめずで稼いだ先にか見い出せない。あれこれ考える時間も細切れのなか、机の上ではなく、飛行機、列車の中、車の運転席、ジョギングや散歩の最中、宴席の合間などに作り出すしかない。私たちのGCOEにクラシックなアカデミズムを求めて来られる研究者の皆さんには、申し訳ないがご期待にはそえそうもない。

ばたばたしているうちに、気がつけば、この11月27日に境界地域研究ネットワーク JAPAN なる組織が立ち上がるという。人ごとのように眺めると、呼びかけ文はなかなかスマートで美しい<sup>(7)</sup>。来年の夏はネットワーク最初の事業として、稚内からサハリンに定期フェリーで渡って国境越えセミナーをやるそうだ。稚内からは帰りに飛行機をチャーターしようなどという声も聞こえてくる。私の眠れない日々はいつまで続くのだろう。



境界地域研究ネットワーク  
JAPAN 設立特別企画  
「激論 北方領土問題」

5 このあたりは「対馬ライブ」の行間を読み込んでほしい。http://borderstudies.jp/essays/live/pdf/Borderlive5.pdf

6 与那国セミナー・ライブをみよ。チャーター便の苦悩についてここでも行間を読まれたい。http://borderstudies.jp/essays/live/pdf/Borderlive7.pdf 実際にチャーター便が飛ぶシーンを見た方は、DVD「知られざる南の国境：八重山と台湾」が最寄りの図書館に入るのをしばしお待ちを。http://borderstudies.jp/news/index.php?y=2011&m=10&log\_id=288

7 http://www.borderstudies.jp/jbsn/statement.htm

## II ワシントンの「呪い」

グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」が掲げたもう一つの目標は、ユーラシアや東アジアの国境・境界研究を束ね、それを世界に「売る」というものだ。そのためにヨーロッパで生まれた研究ネットワーク BRIT (Border Regions in Transition) を日本に誘致する。北方領土問題があるなかで、ロシアとの国境シンポジウムというのは無理であるから、日本の周辺で一番安定している（境界がはっきりしている対馬沖をわたって）福岡・釜山にこれを招致するというのが私たちのプランだ。BRIT は国境を跨いだ 2ヶ国間の地域で移動しながら実施するというのがならわしであり、1994 年のベルリン大会を皮切りに、これまで主としてヨーロッパで持ち回り開催をされてきたが、最近では北米や南米でも行われている<sup>(8)</sup>。

このプランのきっかけは、北海学園大のある先生から、2007 年 10 月にロシアとの国境研究で名高いヨエンスー大（現：東フィンランド大）カレリア研究所と一緒にシンポジウムをやるから、ロシア・中央アジアと中国の国境問題について報告してくれと依頼されていたことで生まれた。この約束を引き受けた直後に、ワシントン DC からの招待状が届くことになる。

先に受けた仕事を可能なかぎりやる、というのが私のモットーであるから、恨まれながらも、ワシントンに渡って 1ヶ月後、再び家族を置き去りにした<sup>(9)</sup>。このときのカレリア研究所の



BRIT IX カナダから米国への船上での再会

所長がイルカ・リッカネン、2009 年 12 月 GCOE 最初の国際シンポジウム報告者の一人、何よりも BRIT 創設時メンバーの一人でもある。私が米国にいることを知ると彼は即座に 2008 年 1 月末開催予定の BRIT 第 9 回のカナダ米国大会（ビクトリア・ベリンガム）に参加しろと私に声をかけてきた。恥ずかしながら、私はこの時点で BRIT の存在を知らなかった。今でこそ、偉そうに、ユーラシアや東アジアの国境問題研究の世界からの「孤立」やネットワークのなさを批判するが、実は数年前の私自身の姿がそうなのだ。

ちなみにイルカは一度を除いてすべての BRIT 大会に参加しているという。これは ABS 会長（後述）も務め、かつてベルリンを拠点に活躍していた BRIT 創設メンバー、ジェームズ・スコットの記録を上回っており、おそらくイルカ以上の BRIT メダリストはいない。

8 BRIT については下記を参照。 [http://www.borderstudies.jp/en/publications/review/data/ebr/2\\_Liikane6.pdf](http://www.borderstudies.jp/en/publications/review/data/ebr/2_Liikane6.pdf)

9 どうでもいい話だが、このとき米国に戻る日が、ファイターズとドラゴンズの日本シリーズ初戦であった。NY の空港で、携帯でどっちが勝ったか着くやいなやチェックした覚えがある。たしかダルビッシュで勝ったように思う。しかし、その後、全敗。かの有名な継投パーフェクト負けをくらい落合中日に前年度の雪辱をくらう。このときほど札幌にいなかった幸せを感じたことはない。その前年、日本シリーズ第 5 戦で歴史的日本一の瞬間を札幌ドームでともに味わった友人は、1ヶ月たっても負けた悔しさがはれないと言っていた。地理的な位置どりが、ものごとを感じたり、考えたり基準に大きく影響することを実感した瞬間であった。こうして私のなかのボーダースタディーズは密かに覚醒していくのだが、ヒルマン監督に向かう旅もこの瞬間に始まった。ヒルマン・ストーリーについては、<http://borderstudies.jp/essays/live/pdf/Borderlive6.pdf> を参照。

イルカの紹介はてきめんであった。プロポーザルがとうに締め切られているにもかかわらず、無理矢理、報告者の一人に入り込んだ私は、もちろん持ちネタの「ユーラシア国境の旅」、中国・中央アジア・ロシアから日本に渡る 8000 キロを越える現場の様相をスライドで披露した。ユーラシア地域の境界問題の報告者は私一人しかいない。

他方で、会議の議論を聴くにつれ、フラストレーションが沈殿していった。「こんなに平和で安定した北米国境。実にうらやましいかぎり。それなのになぜこいつらはチャレンジ、チャレンジとこんなに騒ぐのだろう」。なかでも論議が集中したのが、9.11 以降に米国が導入した「スマート・ボーダー・ポリシー」により、カナダから米国への入国がスムーズに行かなくなったことだ。いかにこれによって経済損失が大きいかが議論され、米国政府への批判が巻き起こった。だが私にはカナダと米国の通関手続にさしてチャレンジあるようには思えず、何が問題なのかさっぱりわからない。困惑する私にとりに座っていた研究者がささやいだ。「いや昔は 5 分だったのが、今は 30 分もかかって困っているのさ」。30 分！ 中国とロシアの国境通関を思い浮かべた私に、これは衝撃であった。このとき境界地域と境界地域を比較する意義に私は覚醒する。イスラエルで境界問題の厳しさを熟知するディヴィッド・ニューマン(ペンギリオン大)が私に言った。「こいつらをおまえがやっているユーラシアに一度、連れて行ってやれ」。

ポリシーメーカーをみんなが批判する。それは健全なことだが、この場にはワシントン州政府の関係者はいても、ワシントン DC はおろか東海岸の研究者は誰もいない(東からの参加者は私のみ。しかも私は外国人)。ブルッキングスでいかに国境問題に周りが無関心であるかに気づき始めたばかりの私は、話題が沸騰したランチオンの場で、いたたまれなくなって手をあげた。「私は境界研究をずっとやってきた。なかなか理解されないことが多いのだが、この BRIT 会議はそもそも境界とは何かなど最初に説明する必要が全くない。これは喜びであり、ようやく我が住処をみつけた気持ちで一杯だ。他方で、皆さんの米国政府に対する憤懣は理解するものの、政策関係者がここには誰もいない。そういう場で声を荒げても皆さんの考えは彼らに伝わらない。どういうチャンネルでそれを政策に反映させるおつもりか。会場は静まりかえった。ワシントン州の関係者は私たちの声は中央政府に届くと応えたが、具体的な中身は聞かれなかった。集まりのあと、誰かが私のそばにきた。「おまえの言うとおりでよ」。この瞬間、国境問題の重要性をワシントン DC や首都に「売る」ことも私の使命の一つとなった。

BRIT の慣例として、最終日の会議で次をどうするか議論する。BRIT はネットワークで、次の会議は次の組織者がすべて引き継ぐため、常設事務局などない。最後の全体会議での提案を受け、それまでの BRIT 組織責任者が話し合っ、次の組織者にバトンを渡すのがならわしだ。ワシントン州ベリンガムでの会議では次の開催組織責任者になるべく手をあげる者は誰もいなかった。BRIT 前組織者でもあるポール・ギャンスター(サンディエゴ州立大)は「おまえが日本でやれ」とせつつ。しかし、私は新参者だ。準備はおろか心構えもできてない。「次の次に」と応えるのが精一杯だった。



BRIT IX 最終日：エマニュエルのあいさつ

このときの BRIT のホストがエマニュエル・ブルネイ・ジェイ（ピクトリア大）。私たちの GCOE を申請段階から強くサポートしてくれただけでなく、GCOE 最初の国際会議や 2010 年の「国境フォーラム IN 対馬」にも参加し、今回の BRIT 第 12 回福岡・釜山大会の誘致も全面的に応援してくれた人物である<sup>(10)</sup>。彼との出会いにより、北米を中心とした ABS (Association for Borderlands Studies) の存在を知り、2 ヶ月後の 2008 年 4 月のデンバーで予定されていた大会へワシントン DC からか駆けつけることにもなった（もちろん、プロポーザルはすでに締め切られていたが）<sup>(11)</sup>。

さてワシントンに翻弄されながら、帰国した私に BRIT 第 10 回大会は 2009 年 6 月に南米チリとペルーの国境地域で開催されるとの通知が舞い込む。私は行くつもりで早々に報告プロポーザルを出す。行く手を阻んだのが、新型インフルだ。北大は当時、「感染地域」に渡航した場合、帰国後 1 週間の「通勤停止」を義務づけていた。だいぶ慣れたとはいえセンター長がそう頻繁に長い間オフィスを離れるわけにもいかない。

その翌月、BRIT の日本誘致を公約した GCOE 採択のニュースが届く。私はポールとの約束を思い出す。この日から「誓い」は「呪い」に変わり、夢のなかで反芻されている。私の眠れない日々は終わりそうもない<sup>(12)</sup>。

10 [http://borderstudies.jp/news/index.php?y=2011&m=09&log\\_id=282](http://borderstudies.jp/news/index.php?y=2011&m=09&log_id=282) ここまで読まれて、いまさら ABS って何？と言いつつもいないとは思いますが、そういう方は振り出しにもどって、GCOE のホームページを読むところから始めてほしい。

11 どうでもいい話だが、このときまたデンバーで開催されていたコロラド・ロッキーズのナイトゲームで、カプスに移ったばかりの福留孝介をみたような気がする。

12 あくまで気が向いたらの仮定だが、「GCOE 秘話」は今後、不定期に連載されるかもしれない。

## チャパーエフ少年の寢床

### 後藤正憲（センター）



フルンゼの使っていた机（フルンゼ博物館蔵）

平成 21 年度からスタートした科研費基盤研究「ヴォルガ文化圏とその表象に関する総合的研究」の一環として、ヴォルガ下流域の視察調査旅行に参加させてもらった。8 月の照りつける日差しの中、サマーラからサラトフ、ヴォルゴグラードへとヴォルガ河を下り、途中エリスタを経てアストラハンをめぐる旅程は、体力を消耗させるものではあったものの、その分充実した内容だった。

モスクワから国内線の飛行機に乗り、私たちが最初に到着した街サマーラで、最初に訪れた場所がフルンゼ博物館（Дом-музей Фрунзе）だった。かつてロシア革命直後の内戦期に、赤軍側の M.B. フルンゼ（1885～1925）率いる東部戦線南方軍の参謀本部だった建物が、現在では博物館として公開されている。さほど大きくない建物の中には、フルンゼ個人の年譜に関する展示品のほか、参謀本部で使われていた調度の類、また内戦時の

軍旗や軍服、ポスターなどが展示されている。

実を言うと、私はそれまでロシア内戦の歴史についてそれほど詳しい知識を持っていなかったし、フルンゼ個人についてはほとんど何も知らなかった。この博物館で初めて彼の波乱万丈の人生に触れ、圧倒された。まだ革命前に、帝国政府への反逆罪で死刑宣告を受けた時期に取られた写真などは、無我の境地に立ったようなその表情が、見るものの心にズシンと響いてきた。

それと同時に、博物館では言いようのない違和感に包まれた。ソ連が崩壊して20年が経過した現代のロシアで、ポリシェビキの勇ましいスローガンが書かれた垂れ幕やポスターに覆われた建物の中を歩いていると、まるで外部から切り離された世界に迷い込んだような気がする。それに、案内してくれた博物館のガイドもまた、私の戸惑いを増幅させた。ジーパンに棉のシャツを爽やかに着こなし、派手なネックレスを身につけた、まるでミュージシャンを思わせる長髪痩身の中年男性が、淀みない口調でロシア革命の内戦について解説している。私が以前から持っていた乏しい知識と、展示品や写真から受ける印象、それに、博物館の外に通じる「いま」が、それぞれまったく重ならず同時に存在する。まるで、寝覚めの悪い朝に、まだぼんやりとしたまま意識の定まる手前をさまよっているような感覚。

歴史の事象がもつ様々なフェーズの間に明確なズレを覚えたのは、私たちが次に訪れたサラトフの街でも同じだった。その中心には、この街の生んだ革命思想家H.T. チェルヌィシェフスキイ(1828～1889)の立派な銅像が立っている。私たちは、彼の生まれ育った家を利用した博物館に、ほとんど吸い寄せられるように訪れた。しかし、博物館には私たちの他にまるで訪問者もなく、そこだけ周りから取り残されたような、ひっそりとした雰囲気が辺りを覆っている。街を案内してくれたクセーニャさんなどは、ご本人が若手の舞台脚本家として活躍されていることもあって、作家としての意識が許さないのだろうか、チェルヌィシェフスキイのことを「ダメな作家だわ」とあっさり切り捨てた。同じ人や物にも複数の位相があり、それぞれに差異があって当然だ。私たちは普段ものごとを理解するときに、ひとつの位相だけ捉えることに慣れてしまっている。だがこうやって、現地に置かれた環境の中で捉え直すと、同じものがそれぞれの位相で全く違う顔を持つことに、改めて気づかされる。

ヴォルガ下流の視察旅行から数ヵ月後、改めて私はチェボクサルイにあるチャパーエフ博物館を訪れた。前々からその存在を知りながら、なかなか足の向かなかったその博物館に行ってみる気になったのも、この夏の経験があったからなの言うまでもない。

鉄道駅そばの公園に、いなく馬にまたがって高々とサーベルを掲げるB.II.チャパーエフ(1887～1919)の銅像がそびえ立つ。その脇にある博物館の建物に入ると、一箇所に集まって井戸端談義をしていたらしい職員の女性たちが、「よっこいしょ」とばかり一斉に腰を上げて、それぞれ自分の持ち場に散っていった。「そっちで上履きはいて。チケットはあっち。入り口はこっち」——投げ遣りな調子で案内された他は特に解説もなく、放っておかれたことをむしろありがたく思いながら、展示品を見る。



フルンゼ(左)とチャパーエフ(チャパーエフ博物館蔵)

「そっちで上履きはいて。チケットはあっち。入り口はこっち」——投げ遣りな調子で案内された他は特に解説もなく、放っておかれたことをむしろありがたく思いながら、展示品を見る。

カザン県ブダイカ村（現在はチェボクサルィ市の一部）のロシア人農民の家庭に生まれたチャパーエフは、フルンゼ率いる南方軍が、白軍の占拠する東部戦線を攻略するのに、大きな功績を立てた指揮官の1人である。内戦当時、赤軍の部隊を束ねて勇猛に闘う彼の姿は、ステンカ・ラージンやプガチョフのイメージと重ねて捉えられた。その後、フルマノフによって彼の活躍を描いた小説が書かれる（初版1923年。邦訳は『チャパーエフ物語』（吉原武安訳）岩波書店、1959年）。さらにワシーリエフ兄弟による映画『チャパーエフ』（1934年）の成功によって、彼の名は不動のものとなった。映画の中のチャパーエフは、気にいらぬことがあると椅子を地面に叩きつけて壊したり、敵味方の布陣を表わすのに使ったジャガイモを、勢い余って齧ったりする奔放な熱血漢として描かれている。

部下のペーチカと狙撃手アンナのロマンスをも交えた映画のイメージは、その後意外な形で受け継がれることになる。アブラム・テルツ（シニャフスキイ）によると、革命50周年の1967年頃から、チャパーエフを主人公とするアネクドート（ジョーク）が人々の間で語られ始め、その後チャパーエフは最も多くアネクドートに登場する人物の1人となった（Абрам Терц, Анекдот в анекдоте // Одна или две русских литературы? L'age D'homme, 1981）。たいていは、うぶで間抜けなペーチカと、それに劣らずとぼけた指揮官チャパーエフの軽妙なやり取りが、笑いの種となっている。アネクドートはブレジネフ時代のソ連で全盛を迎え、ベレストロイカの80年代後半にはすでに後退したらしい。しかし、私が大学院生だった1990年代後半でも、まだ以前の名残で際限なくアネクドートを披露したがるロシア人に出会うことが時々あった。その頃にかかれたヴィクトル・ペレーヴィンの小説『チャパーエフと空虚』（初版1996年。三浦岳氏による邦訳は群像社、2007年）は、アネクドートに映し出されたチャパーエフとペーチカの姿を原型とした作品である。主人公の僕（ピョートル）は、夢と現のあわいで現代のロシアと内戦期の混乱の中を行き来する。そこで出会ったチャパーエフとのやりとりを通して、自分の中の異なる位相を発見していくのだ。



チャパーエフの生家（左）とその寝室

職員が退屈するほど人の来ない博物館で、ひと通りチャパーエフに関する展示物——もちろん内戦期のものだけに限られる——を見終わって帰ろうとすると、建物を出てから別棟に行けとのこと。言われた通りに行ってみると、少し離れた場所に丸太作りの小さな家が立っていて、入り口のところで案内役の女性職員が私を待っていてくれた。小屋と言ってもいいほど小ぢんまりとした家は、チャパーエフの生家をそのままの形で移築したものだ。職員が鍵を開けて中に導きながら、そこにあるものについて説明してくれた。薄暗い建物の中には、どこにでもあるような農家の調度類が並ぶ。奥の間は寝室になっていた。女性職員によると、ベッドには両親が、温かいペチカの上には祖父母が寝て、9人いたという子供たちは、ペチカの上から渡した板と天井との間の狭い隙間に潜り込んで寝ていたそうだ。アネクドートを

口にする人も減多に見かけなくなった現在、英雄の少年時代を夜ごと包んでいた寢床は、静かに何かを物語っているようで、楽しい気分になった。チャパーエフ少年は、ここでどんな夢を見ていたのだろうか。

## ワルシャワ東方研究所訪問記：もはや社会主義後ではない

藤森信吉（センター）

2011年9月、私は15年ぶりにポーランドを訪問する機会に恵まれた。在波日本大使館の尽力による国際交流基金助成事業「ユーラシア国境地域の検証」がポーランド東方研究所（OSW、ワルシャワ）で開催され、我々北大GCOE「境界研究の拠点形成」研究員一同（岩下、井澗、福田、藤森）が、研究報告することになったのだ。正直に言うと、東欧の専門家の前で報告を行うことに多少の恐怖を感じていた。ましてや、今回のテーマは専門外の沿ドニエステル共和国である。



整備が行き届いたワルシャワ市内

しかもOSWのHPにはしっかりと「モルドヴァ専門家」がリストされており、余所者が半可通な報告をして炎上する、というどこかで馴染みの光景が脳裏に浮かんだりした。

15年前のワルシャワは、キエフで専門調査員をしていた私の目には眩いばかりの「ヨーロッパ」都市に映った。今も昔もウクライナは「ヨーロッパ」国を自称しているが、当時のキエフは経済危機のご真ん中で殺伐とした雰囲気街中に充満し「ヨーロッパ」の片鱗などどこにもなかった。ワルシャワ中心街のちょっとしたファーストフードや英語を解するホテルの掃除係にすら、越えられない壁を感じたものだった。もっとも、90年代半ばにキエフに来た日本人は社会主義丸出しの街を気にしなかったようで、ポーランドからの出張者含めて皆、異口同音にウクライナ女性の美しさを称えて帰っていた。その後、ポーランドはEU、NATO加盟を果たし、名実ともに「ヨーロッパ国」といえる存在になった。ウクライナも2000年以降、経済成長を遂げEU準加盟を窺うまでになったが、自由度や腐敗認識指数、報道自由度といった各種指数を見ても、両国間にはまだまだ大きな差がある。

そのポーランドだが、入国審査が経由地ヘルシンキ空港で済ませられることで早くも「ヨーロッパ」国を実感した。ポーランドのEU加盟時、某教授が「我々ポーランド研究者は今日からEU研究者だ、君たち旧ソ連研究者と違う」と高笑いしていたことを思い出した。尤も、キエフの入管審査も実は非常に迅速であるため、シェンゲンの壁を体感できる以上に実質的な差はないのだが。ワルシャワでは、真新しい空港ターミナル以上に、モスクワ、キエフ、北京等でお馴染みのタクシーの客引きがないことにも妙に感心した。EU加盟国共通の法令でもあるのだろうか。ワルシャワ市内を走る乗用車は何れも真新しく、かつて路上を覆い尽くしていたポロネーズやラーダは完全に姿を消していた。我々が宿泊したホテルは、地方政



研究会のもよう

府関係者用のホテルだったようで、社会主義時代と変わらないであろう素っ気なさであったが、ホテルから OSW までの歩道や周囲の公園は綺麗に整備されていた。今や「EU 研究者」となった福田研究員が、EU 構造基金のおかげではないかと教えてくれた。しかし、仮にロシアやウクライナで公園や歩道が誰かの資金で整備されたとしても、新たな路駐スペースやテナン

トに化けるだけではないだろうか。現にキエフの中心街にあるフレシチャク通りの美しい歩道には車が所狭しと駐車しており、管理する市当局の小銭稼ぎの場となっている。

OSW は、建物内の調度、会議室のつくり、進行、飲み物・軽食の用意、グッズ、そしてフルパーパーが用意されない点が、ブルッキングス研究所のようなワシントン DC のシンクタンクと似ているように感じられた。異なる点といえば、コーヒーがインスタントであったことくらいだろうか。何より感心したのは、副所長、部門長を含めた研究員の若さである。一名だけ、頭髪から判断して年齢が高そうな研究員がいたので「社会主義時代にはどこで働いていたのですか」と質問をしたところ、「まだ学生だったよ…」と返されてしまった。肝心の研究報告だが、OSW 研究員達の見事な英語力に感銘を受けた。パワーポイントによるガイドなどなくても、簡単なプロットを記した紙だけで淀みなく話し続けるし、コメントの英語も崩れない。ただ、正直に言うと、豊富な知識量に対して、テーマ設定が学術的にやや地味なように思えた。企画が決まってから急遽、動員されたのかもしれない。逆に我々はリハーサルを重ねてプレゼンも練り上げていたが、逆に言えば、パワーポイント頼みであり、アドリブに乏しい。私は“Business Interests in Transnistria”と題し、非承認国家問題を多国籍企業の利益から読み解く報告を行った。しかし、アクターごとのリサーチが不十分で、件の「モルドヴァ専門」研究員から事実関係の訂正を受けた。しかしながら、「結論の部分は 100% 賛成する」という、実にヨーロッパ的 (?) なコメントもいただいた。また、OSW 研究員の何人かからも、好意的なコメントをいただいた。昼食時、館内でバイキング形式のランチが



傷みが目立つ文化科学宮殿

用意されたが、その際に、様々な情報や資料の在り処を聞くことができた。頂いた情報を加味して、何処かに論文を発表できればと考えている。このように OSW では局地的に受けた私の報告だが、ABS (The Association for Borderlands Studies) ソルトレイクシティ大会で同様の報告した際には、会場からの反応を全く得ることができなかった。遠く離れたマイナー地域の話をされても、イメージが湧かないのだろう。このことはどの地域にも当てはまる。実際のところ、日本国内で我々が重要視している北方領土や普天間の海兵隊基地移転でさえ、一步国外を出れば、単なる小さな係争問題の一つとしか見られないようだ。我々 GCOE は特に沖縄基地問題については、ワシントン DC でのシンポジウム (2010 年 3 月) をはじめとし、様々な機会を通じて国外の聴衆に発信しているのだが、残念ながら彼らの反応は芳しくない。しかし「基地」から離れて、「地域的安全保障」や「ジェンダー問題」といった大きなテーマに転

化すると、会場は俄かに活気を帯びはじめる。地域研究にしても歴史学にしても、何らかの大きな枠組みで論じる必要があることを改めて認識した。

報告の翌日、我々はスターリン建築で有名な文化科学宮殿を見学したのが、こちらはEUからの投資が回っていないのか、傷みがかなり目立った。勤労意欲がまったく感じられない展望台エレベーターガールと相まって、真に社会主義時代を体感できるものであった。



ポーランド美女

そういえば、本年は、ウクライナの公式外交路線「ヨーロッパ選択」によれば、「ウクライナがEU加盟のための国内条件を全て整える」意義ある年でもある。しかし、多分に政治的なティモシェンコ裁判で、ウクライナはEU早期加盟の夢を自ら閉ざそうとしている。「美しすぎる政治家」を刑務所に閉じ込めて露出を低下させることは、「ヨーロッパ国ウクライナ」のみならず、「美女国ウクライナ」イメージを損なうことになるかもしれない。

## 学 界 短 信

### ◆ 第3回スラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンス（北京） における一つのパネルにて ◆

2011年8月27-28日にかけ、北京で開催された「第3回東アジア・スラブ・ユーラシア学会」において、「ユーラシア主義の過去と現在：東からの視線」パネルがおこなわれた。

ユーラシア大国としてのロシアの例外主義 (Russian exceptionalism) は、1920-1930年代にかけて、ポリシェヴィキに反対したロシア人によって形成された理論としてのユーラシア主義 (евразийство) に端を発している。こうした知識人や学者の多くは革命を逃れ、西欧における亡命者として、新たなロシア・ナショナリズムのイデオロギーを構築した。初期ユーラシア主義者の思想は、力強く、喚起力に富むもので、ソヴィエト崩壊以降のロシアにおいても新たに関心と熱狂をもって取り上げられている。

近年、ユーラシア主義に対して学術的な関心の復興が見られるようになってきた。しかし、それは「大西洋」的な見方であり、大陸での拡張主義のイデオロギーとしての政治的な意義に焦点を当てたものであった。それに対し本パネルでは、中国、日本、イギリス、ロシアの研究者が参加して、より広範に知的、地政学的、年代記的な観点から考察した。特に、ユーラシア主義へのアジアの態度と、ユーラシア主義者の思想におけるアジア理解が議論された。

本パネルでは、Wu Yuxing氏 (中山大学、中国) と斎藤祥平 (北海道大学) が、アジアの視点から古典的なユーラシア主義について議論した。ポール・リチャードソン氏 (パーミンガム大学、英国/北海道大学) は、南クリル諸島 (北方領土) をケーススタディとして取り上げ、それがいかにユーラシア主義や現代ロシアのアイデンティティに関連するのかを考察した。山本健三氏 (長安大学、韓国) は、ロシア思想におけるレイシズムと黄禍論について

論じた。その後、アンドレイ・ポポフ氏（モスクワ国立大学、ロシア）と黒岩幸子氏（岩手県立大学）が各報告についてコメントをおこなった。ポポフ氏は、古典的ユーラシア主義とロシア思想について論評をおこなった。黒岩氏は、主にリチャードソン氏の報告を取り上げ、アレクサンドル・ドゥギンの思想を「ユーラシア主義」とすることに疑問を呈した。このパネル全体を通じて、古典的なユーラシア主義とネオ・ユーラシア主義の違いが明確になり、ユーラシア主義の研究に当たって、様々な方法のありうることが明らかとなった（本パネルについてのポポフの論評は以下参照）：

[http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group\\_06/achievements/index.html#20111005](http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_06/achievements/index.html#20111005)。

ユーラシアの様々な地域から参加者を集めることができ、これからの議論に創造的な展望がもたらされるであろう。さらに、このパネルがユーラシア主義研究の国際的な協力をさらに促進することも期待したい。同時に筆者自身は、特に中国の研究者と交流するために、実践的なロシア語能力、特に会話能力を向上させる必要があるということを痛感させられた。将来、再び中国での国際会議に出席する機会を得ることがあれば、ロシア語での報告をおこないたい。

その一方で、ITPの一環としておこなわれた英語キャンプで、英語での報告方法を学んだことが、大いに役に立ったことを付け加えたい。さらに、そこで筆者は、同じくキャンプに参加していた Feng Yujun 氏（中国現代国際関係研究所）と知り合い、彼の好意で Wu 氏とコンタクトを持つことができた（参照：<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/itp-hp/itp-index.html>）。

最後に、筆者は GCOE「境界研究」教育プログラムの補助によって、この会議に参加できたことについて謝意を示したい。また、拙稿にコメントをくださり、ご協力いただいた、先生方、スタッフ、同僚たちに感謝を捧げたい。これらの協力なしには、筆者は本パネルを組織することはできなかったであろう。本当にありがとうございました。[斎藤祥平（桜間訳）]

### ◆ 学会カレンダー ◆

2011年11月25-27日 スラブ研究センター冬期シンポジウム（GCOE） 於北海道大学

2012年1月19-20日 スラブ研究センター冬期シンポジウム（新学術領域） 於スラブ研究センター

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

## 図書室だより

### ◆ 『正教評論 *Православное обозрение*』 および 『時代 *Век*』 の購入 ◆

スラブ研究センター図書室では、この春、19世紀のロシアで出版された雑誌『正教評論』の一部と、『時代』のマイクロフィッシュを購入しましたので、お知らせします。

『正教評論』（モスクワ、1860-1891年）は、一般向けのロシア正教普及誌として1860年に創刊されました。編集長は、H.セルギエフスキーですが、当時のモスクワ府主教フィラレート（ドロズドフ、1782-1867）の意向があったとされています。

大改革の時代をむかえた当時のロシアでは、正教会の改革が提起され、専門的な論文を掲載する神学アカデミーの紀要とは別に、正教会に関する一般知識人向けの雑誌がいくつか創刊されました。本センターの所蔵資料では、そのひとつとして、同じ1860年に創刊された『巡礼者 *Странник*』を挙げることができます。

『正教評論』誌は、正教会教育、聖書のロシア語訳、宣教活動、その他ロシア正教会の状況と並んで、西欧におけるキリスト教会の動向を多く取り上げました。執筆陣には、ロシア正教会の聖職者たちだけでなく、他宗派の聖職者や俗人も加わり、フョードル・チュツェフ (1803-1873)、イワン・アクサーコフ (1823-1886)、ユーリー・サマーリン (1819-1876) などの著名人も寄稿しました。

今回、購入したのは、1860年から1868年の部分ですが、今後、残りの部分も整備を進めたいと考えています。

同時期に購入した革命前ロシアの雑誌として、『時代』があります。1861年にペテルブルクで創刊された週刊誌で、副題は社会・政治・文学雑誌 журнал общественный, политический и литературный とあります。

ピョートル・ヴェインベルグ (1831-1908) を編集長に、アレクサンドル・ドルジーニン (1824-1864)、コンスタンチン・カヴェーリン (1818-1885) らが参加して作られたこの雑誌は、当初成功をおさめたものの、翌1862年初めに編集部が改組された後の対立により、同年の17号で廃刊となりました。なお、今回購入したフィッシュには、1861年の発行分だけが含まれています。[兔内]

## 編集室だより

### ◆ 論集『アジア・ロシア』、ラウトレッジ社より刊行 ◆

2007年度冬期国際シンポジウムのペーパーをもとにした論集『アジア・ロシア：地域的・国際的文脈の中の帝国権力』が、イギリスのラウトレッジ社から刊行されました。中央ユーラシアとシベリアでのロシア帝国の統治システムや現地の人々との相互作用、隣接地域との関係などを多角的に論じています。

シンポジウムは新学術領域研究第4班の準備段階で開催されたもので、論集は同班の研究成果の一部でもあります。また、ラウトレッジでの刊行決定に当たっては、NIHUプログラム「イスラーム地域研究」の支援を受けました。ここに御礼申し上げます。

シンポジウム報告集は通常スラブ研究センターで刊行していますが、出版市場に出回らない、日本人のみによる編集では英語に難が残る、という問題がかねてから指摘されてきたため、今回は英語圏の大手出版社から刊行することにしました。反面、本の無料配布やウェブ掲載はできなくなってしまうのですが、図書館などで購入していただければ幸いです。タイトルおよび収録論文は以下の通りです。[宇山]

UYAMA Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2011), xv + 296 pp., £80.00.

Introduction: Asiatic Russia as a space for asymmetric interaction / UYAMA Tomohiko

Part I Russia's eastern expansion: its "mission" and the Tatars' intermediary role

- 1 The Russian Empire's civilizing mission in the eighteenth century: A comparative perspective / Ricarda VULPIUS
- 2 Tatarskaia Kargala in Russia's eastern policies / HAMAMOTO Mami
- 3 The Russian Empire and the intermediary role of Tatars in Kazakhstan: the politics of cooperation and rejection / Gulmira SULTANGALIEVA



Part II Taming space and people: institutions and demography

- 4 Intra-bureaucratic debate on the institution of Russian governors-general in the mid-nineteenth century / MATSUZATO Kimitaka
- 5 Colonization and "Russification" in the imperial geography of Asiatic Russia: from the nineteenth to the early twentieth centuries / Anatolii REMNEV
- 6 Empire and demography in Turkestan: numbers and the politics of counting / Sergei ABASHIN

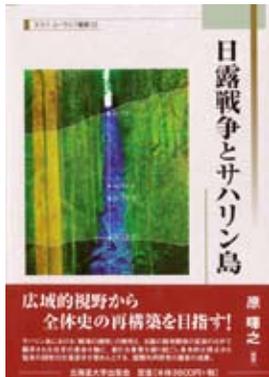
Part III Russian power projected beyond its borders

- 7 Russo-Chinese trade through Central Asia: regulations and reality / NODA Jin
- 8 Muslim networks, imperial power, and the local politics of Qajar Iran / Robert D. CREWS
- 9 Sunni-Shi'i relations in the Russian protectorate of Bukhara, as perceived by the local 'ulama / KIMURA Satoru
- 10 The open and secret diplomacy of Tsarist and Soviet Russia in Tibet: the role of Agvan Dorzhiev (1912-1925) / Nikolay TSYREMPLOV

Part IV Asiatic Russia as a space for national movements

- 11 Muslim political activity in Russian Turkestan, 1905-1916 / Salavat ISKHAKOV
- 12 The economics of Muslim cultural reform: money, power, and Muslim communities in late imperial Russia / James H. MEYER
- 13 The Alash Orda's Relations with Siberia, the Urals and Turkestan: the Kazakh national movement and the Russian imperial legacy / UYAMA Tomohiko

◆ スラブ・ユーラシア叢書第10巻の刊行 ◆



このたび「スラブ・ユーラシア叢書」シリーズの第10巻として、北海道大学出版会から原暉之編著『日露戦争とサハリン島』が刊行されました。サハリン島は、日本とロシアの境界領域に位置するが故に19世紀半ばから20世紀半ばにかけて何度も国境の引き直しと住民の入れ替えを経験した特異な島です。この島の日露戦争前後の時代に焦点を当て、既存のロシア史、日本史、北方史といったジャンルを越えて多角的な視点からこの島の歴史を凝視しようとする共同研究の成果として生まれたのが本書です。内容は、序章、第1部「境界としてのサハリン島」、第2部「戦争の帰結と新たな国境の創出」、第3部「地域を超える人物と経済交流」、終章からなり、各部分はそれぞれ4つの章から構成されています（目次をご参照ください）。「日露戦争とサハリン島」という主題は、戦争の結果ポーツマス条約によって南半分が日本領樺太となったことが広く知られてきましたが、それに先立つ時代についても、島内の戦争そのものについても、戦争前後の関係についても未解明の部分が多く残されていました。本書は多様な切り口から新たな事実を掘り起こし、従来の欠落部分を埋めようとする意欲的な論文集となっています。内容は以下のとおりです。[原暉之]

序章：原暉之／日露戦争期サハリン島史研究の概観と課題

第1部：境界としてのサハリン島

- 第1章 天野尚樹／見捨てられた島での戦争：境界の人間／人間の境界
- 第2章 神長英輔／開かれた海の富と流刑植民地：日露戦争直前のサハリン島漁業
- 第3章 田村将人／先住民の島・サハリン：樺太アイヌの日露戦争への対処
- 第4章 越野剛／二〇世紀ロシア文学におけるサハリン島：チェーホフと流刑制度の記憶

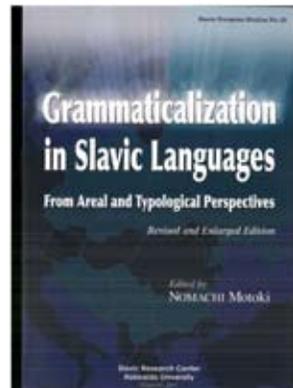
第2部：戦争の帰結と新たな国境の創出

- 第5章 板橋政樹／退去か、それとも残留か：一九〇五年夏、サハリン島民の「選択」
- 第6章 ヤロスラフ・シュラトフ／ポーツマスにおけるサハリン：副次的戦場から講和の中心問題へ

- 第7章 塩出浩之／日本領樺太の形成：属領統治と移民社会  
 第8章 原暉之／日露戦争後ロシア領サハリンの再定義：一九〇五～一九〇九年  
 第3部：地域を越える人物と経済交流  
 第9章 沢田和彦／民俗学者プロニスワフ・ピウスツキとサハリン島  
 第10章 倉田有佳／ビリチとサハリン島：元流刑囚漁業家にとっての日露戦争  
 第11章 三木理史／日露戦後の環日本海地域における樺太：新潟県実業視察団を通じた考察  
 第12章 白木沢旭児／北海道・樺太地域経済の展開：外地性の経済的意義  
 終章：デイヴィッド・ウルフ／サハリン／樺太の一九〇五年、夏：ローカルとグローバルの狭間で

◆ Slavic Eurasian Studies No. 23 ◆  
*Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives* の改訂・増補版の刊行

昨年秋に刊行された SES シリーズ第 23 巻 *Grammaticalization in Slavic Languages: From Areal and Typological Perspectives* ですが、刊行後数ヶ月で早くも在庫切れになったので、11 月にスラブ研究センターで国際シンポジウム「スラヴ諸語における文法化と語彙化」が開催されるのに合わせて改定・増補版を出版することになりました。増補版では、東スラヴ諸語を分析する 3 本の論文が追加されました。掲載内容は以下の通りです。[野町]



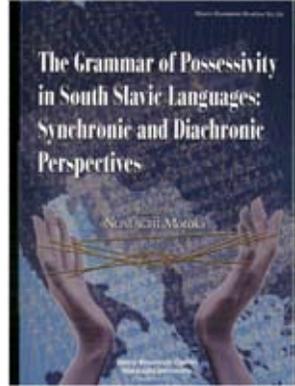
- |                                |   |
|--------------------------------|---|
| Bernd Heine and Motoki Nomachi | Is Europe a Linguistic Area?  |
| Alja Lipavc Oštr               | Grammaticalization and Language Contact between German and Slovene  |
| Dieter Stern                   | Grammaticalization in Russian-Lexifier Pidgins  |
| Alina Keprinska                | Grammaticalisation of the Masculine and Non-masculine Personal Category in the Polish Language  |
| Olga Mišeska Tomić             | The Macedonian “Have” and “Be” Perfects   |
| Andrii Danylenko               | Is There Any Inflectional Future in East Slavic? A Case of Ukrainian against Romance Reopened   |
| Lidia Federica Mazzitelli      | Possession, Modality and Beyond: The Case of <i>Mec'</i> and <i>Mecca</i> in Belarusian   |
| Милка Ивић                     | О доприносу српског префикса <i>од-</i> семантичком и граматичком лику глаголских лексема   |
| Paul Wexler                    | Bernd Heine and Tania Kuteva, <i>The Changing Languages of Europe</i> . Oxford University Press, 2006, xvii + 356 pp. (Review Article)  |
| Angelina Pančevska             | Zuzanna Topolińska, <i>Polish ~ Macedonian, Grammatical Confrontation: The Development of Grammatical Categories</i> . Macedonian Academy of Sciences and Arts, 2008, 218 pp. (Book Review) |

◆ Slavic Eurasian Studies No. 24 ◆  
*The Grammar of Possessivity in South Slavic Languages: Synchronic and Diachronic Perspectives* の刊行

SES シリーズ第 24 巻 *The Grammar of Possessivity in South Slavic Languages: Synchronic and Diachronic Perspectives* が刊行されました。本論集は昨年おこなわれた ICCEES 世界大会で編者が組織したパネルセッションでの 3 報告を軸に、これまでの共同研究の成果である論文数編をまとめたものです。タイトルの通り、本論集は南スラヴ諸語の文法構造および意味論の通時的および共時的研究の論集ですが、言語類型論などで注目される言語理論に基づく研究も含まれており、スラヴ語学者にとどまらず様々なプロフィールの言語学者にとって興味深い

論集になったと期待しています。掲載内容は以下の通りです。[野町]

Ranko Matasović	Slavic Possessive Genitives and Adjectives from the Historical Point of View
София Милорадович	Способы выражения притяжательности в сербских народных говорах на фоне аналиитизации
Jasmina Grković-Major	The Development of Predicative Possession in Slavic Languages
Motoki Nomachi	From Possession to Passive: The Slovenian Recipient Passive through the Prism of Grammaticalization Theory
Liljana Mitkovska	Competition between Nominal Possessive Constructions and the Possessive Dative in Macedonian
Frančiška Lipovšek Sonja Milenkovska	The Meaning of EPCs: Possessive Dative and Possessive Locative Juxtaposed Possessor and Possessum as Arguments of the Nonpossessive Predicate Realized as Nominative and Accusative NPs in Possessive Relation <i>Body/body Part</i> (Macedonian ~ Polish)



◆ 『スラヴ研究』 ◆

和文のレフェリー制学術雑誌『スラヴ研究』第59号への投稿は8月末で締め切られました。今回は例年よりも少ない9件の応募があり、2012年春の発行を目指して現在審査をおこなっています。[長縄]

会 議 (2011年8月～10月)

◆ センター協議員会 ◆

2011年度第2回 10月18日

- 議題
1. 教員の人事について
  2. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース126号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。  
[望月／大須賀]

- 8月18日 大西健夫（岐阜大）  
8月22日 田中良英（宮城教育大）  
8月31日 木寺律子（同志社大）  
9月1日 近藤大介（一橋大・院）、千葉美保子（関西大・院）  
9月15日 YU Xintian（上海国際問題研究院、中国）、WU Jinan（同）、LI Xiushi（同）、Qiang Xiaoyun（同）、QIAN Zongqi（同）、CHEN Youjun（同）

9月29日 Vít Dovalil (カレル大、チェコ)、Marián Sloboda (同)  
10月1日 熊倉潤 (東京大・院)、松田哲 (京学園大)  
10月2日 Nguyen Anh Phong (淑徳大)  
10月11日 Vesna Požgaj Hadži (リュブリャナ大、スロベニア)  
10月17日 Sufian Zhemukhov (ジョージワシントン大、米国)  
10月20日 高橋知之 (東京大・院)

### ◆ 研究員消息 ◆

ウルフ・ディビッド研究員は8月3日～9月1日および9月8～22日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、米国に出張。

望月哲男研究員は8月5～16日の間、科学研究費研究に関するヴォルガ流域現地調査のため、ロシアに出張。また、9月8～19日の間、新学術領域研究第6班「地域大国の文化的求心力と遠心力」に関する現地調査およびセミナー出席ならびに発表のため、インドに出張。

野町素己研究員は8月5～17日の間、科学研究費研究に関するヴォルガ流域現地調査のため、ロシアに出張。また、8月31日～9月9日の間、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関する学会研究報告及び資料収集のため、フランスに出張。また、9月12～18日の間、科学研究費研究に関する国際研究集会打合せのため、セルビアに出張。また、9月20～25日の間、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関する国際シンポジウム参加及び研究打合せのため、ベルギーに出張。

田畑伸一郎研究員は8月8～16日の間、新学術領域研究第3班「持続的経済発展の可能性」に関する現地調査のため、ロシアに出張。また、8月25～30のあいだ、学会発表および中ロエネルギー協力に関する調査のため、中国に出張。また、9月7～10日の間、サハリン州の社会・経済活動に関する調査のため、ロシアに出張。

長縄宣博研究員は8月12～28日の間、新学術領域研究第5班「国家の輪郭と越境」に関する資料調査のため、英国に出張。

松里公孝研究員は8月21日～9月1日の間、科学研究費研究に関する現地調査のため、中国に出張。また、9月3日～10月2日の間、科学研究費研究に関する現地調査および研究打合せおよびストレイピン首相没後100周年記念国際学会参加のため、ロシアに出張。また、10月12～24日の間、科学研究費研究に関する現地調査および研究打合せのため、ロシアに出張。

兔内勇津流研究員は8月29日～9月11日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、ロシアに出張。

岩下明裕研究員は、9月1～13日の間、セミナー、コンファレンス、およびフォーラム出席のため、ポーランド、スイス、フランス、徳之島に出張。また、9月29日～10月1日の間、第6回沖縄国際学術会議「東アジアの国境問題と住民の暮らし」参加のため、韓国に出張。また、10月16～19日の間、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」に関するフォーラム出席および研究打合せのため、香港に出張。

宇山智彦研究員は、9月10～25日の間、科学研究費に関する国際会議での研究成果報告および資料収集のため、ロシア、英国に出張。

外国人特任教員の招へいと来日時のお世話をする担当になって、はや8年が経つ。最近の4年は10ヵ月間3名ではなく、5ヵ月間6名を招へいするスタイルが根付き、人数が増えた分仕事が煩雑になり、出会いが増えた。▲研究員の先生たちと違い外国に旅行することの減多にない自分にとって、外国人とのつきあいは貴重な異文化体験だ。ロシア語話者たちは昼間部屋の照明を減多につけないため不在と勘違いさせられたり、誕生日には自らが知り合いを招いてごちそうを振舞うのを見て驚かされたり、ドアのノックが3回だと外国人、2回だと日本人だと見当がついたり、その他もろもろ。▲人間相手の仕事なので、平等に接しているつもりなのに、相手から返ってくる反応は正反対だったりする。ある人からは送別会で「プロとしてのりっぱな仕事ぶり」を褒められたかと思うと、別の人は行き違いから帰国ぎわに大喧嘩になり（言葉が流暢でない分、つい感情表出がオーバーになってしまった）、怒った相手がセンター長にクレームのメールを送りつけてきたり。▲ついこの間帰国した2人には、自分だけでなく何人かの人がずいぶん世話を焼くことになった。チャーミングなロシア人A嬢は、普段は快活で人なつこいがストレスに弱く、普通の人になにも感じない匂いに悩んで部屋の交換を要求してきたり、出張後に全身に発疹が出たときは、重大な病気かもしれないと大騒ぎしたので病院に連れて行ったところ、疲労による一時的なものにすぎないと判明したり。いろいろあったがお別れのときロシア式に3回キスされたときは、慣れない異国の作法に固まってしまったものの、悪い気はしなかった。▲足が悪く複数の持病をかかえながら果敢に日本での研究生活に挑戦したL氏は、日本滞在中に症状が悪化し、複数の病院に通うため、複数の人が世話をすることとなった。歩いてセンターに来るのが難しくなり、タクシー代がずいぶんかさんだようだ。帰り際、「日本での生活では、まるで赤ん坊に戻ったようだった。人の助けがないと何もできないんだから。」といつもは口数少ないL氏がつぶやいていたのが印象に残っている。▲普段は1人でパソコンに向かって編集作業をしている時間の長い自分が、人間関係を学べる貴重な時間として、これからも外国人との関係を大事にしたいと思っている。[大須賀]

エッセイ	堀江典生	地域研究コンソーシアム賞研究作品賞を受賞して	p. 9
	岩下明裕	いかに私は国境に紡がれたか： GCOE「境界研究の拠点形成」秘話・誕生編	p. 11
	後藤正憲	チャパーエフ少年の寢床	p. 16
	藤森信吉	フルシャフ東方研究所訪問記：もはや社会主義後ではない	p. 19

2011年11月25日発行

編集責任 大須賀みか  
 編集協力 家田修  
 発行者 望月哲男  
 発行所 北海道大学スラブ研究センター  
 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目  
 Tel.011-706-3156、706-2388  
 Fax.011-706-4952  
 インターネットホームページ：  
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>